

一九六四年十月十六日の在ソ日本大使館の動き

伊藤 憲一（財団法人日本国際フォーラム理事長）

昨年末に本『会報』編集長の恩田宗大使から「内容は、ソフト、ハード、どちらでもよいから、なにか一筆してください」と執筆依頼を受けて以来、本『会報』への寄稿はつねに頭のなかにあったのだが、どうしても適切なテーマが思いつかず、今日にいたってしまった。私は二十二才で入省し、三十九才で退官したので、十七年間しか在省していないが、モスクワではフルシチョフの失脚を、マニラではマルコス戒厳令施行を、ワシントンではニクソンの辞任を、それぞれ政務担当書記官としてフォローする巡り合わせとなり、それはそれなりにいろいろの思い出がある。本省で南東アジア第一課長としてサイゴン陥落後の対ベトナム外交正常化に取り組んだときのエピソードにも、いずれは語らねばなるまいと思っている部分がないわけではない。しかし、語る以上は、正確な資料に基づく公正かつ客観的なものでなければなるまい。また、外交機密に関する部分は、少なくとも三十年以上は黙して語るべきではないだろう。

そんなこんなことを考えているうちに、時間だけが過ぎていたのだが、この度まったくの偶然で四十五年前に焼却されたはずのある文書が出てきた。左に転載する手紙（と両親）に出した手紙で、末尾に「読後焼却するよう」依頼しており、私はそんな手紙の存在自体をすらすっかり忘れていたのだが、それが今回私の目の前に突然姿を現したのである。父はすでにないが、九十五歳の母もすでに三年越しの病院生活を送っている。その母から頼まれて、母の身辺整理をしている最中に、この手紙が出てきたのである。この手紙は、フルシチョフ失脚の当日（一九六四年十月十六日）の在ソ日本大使館の一日の動きを、当時大使館の末席にいた私の目をつうじて描いている。私は、ハーバード大学でのソ連研究を終え、モスクワに着任して二年近くが経過したところであった。家族あての手紙であるので、外交機密もなにもあったものではなく、率直そのものの文章となっている点は、ご了解願いたい。なお、この手紙自体は、当時のソ連秘密警察による常套的な検閲を避けるため、外交公囊でスエーデンに運ばれ、ストックホルムで投函されている。

あれから四十五年が経過し、ソ連という国もはや存在しない。この手紙を公開することにもはや障害はないであろう。日本の対ソ外交に関心をもつひとにとって、関連資料の一つとして、お役に立てば幸いである。

.....

一九六四年十月十六日

今日一九六四年十月十六日は、外交官としての僕にとって実に忘れがたい日の一つになった。日記代りにこの手紙を書くことにしたので、読後、どこかに保管しておいてもらいたい。これを読む瑛子や両親にとつては、モスコウで外交官生活を送るべくのある日が、ほうふつとして眼前に浮かんでくれれば、それで手紙としての役割は果すわけです。

朝九時、ベッドから手を伸ばして枕元のトランジスター・ラジオを取りよせて、まだ半分寝ぼけまなこでニュースのスイッチを入れた。どうせ昨日のオリンピックの成績でも聞かせられるか、或は三人乗りコスモナフトの英雄的功績の賛辞でも聞かせられるのだろうかと思つて。すると、

「同志フルシチョフは、高齢と健康状態悪化のため、党第一書記、党幹部会員、首相の地位を辞し、党第一書記にはブレジネフが、首相にはコスイギンが夫々任命された」という言葉が飛込んで来た。その瞬間、ぼくは驚きの余り、気がついた時は、ガバリと起き上がっていた。寝む気(ママ)など一辺にどこかに吹飛んでしまつていて、次の瞬間には、電話機に飛びついていた。大使館の宿直者がすぐ出た。昨晩は夕刊のイズベスチアがとうとう出ず、今朝になって朝刊のプラウダと同時配達され、今朝の各紙に発表されているという。ただ、何れも簡単なオフィシャル・コミュニケーションのみで何らのコメントも見られない由。国内むけ放送は、今朝三時より放送を開始したが、海外にはそれより若干早く流され、大使館はBBCから第一報を得、この事実のみは、既に東京(本省)に打電してあるという。我々だけでなく、一般にモスコウの観測筋にとつて、これは全くの寝耳に水で、この政変を予知していた筋は皆無という。

何れにしる、急遽大使館にかけつける。十時の登館時にはまだ三十分もあるというのに、大使館には、続々館員がつかけてきている。

十時、大使、公使のもとに参事官三人、書記官三人とそれにぼくが加わり、緊急幹部会(情勢分析研究会)が開かれた。ソ連側の公式発表は、数行の短いものだが、この裏にあるものは何か、今回の政変の真の原因は何か、将来のソ連の内外政策は変わるか、これらについて至急我在ソ大使館の公式見解を東京(本省)に打電してやらねばならない。日本政府は、モスコウ(大使館)からの情報を鶴首している。意見をもとめられて、一人ずつ自分の見解を述べ始める。これは、その発表を素直にとつて、平和的政権授受の先例をつくつたと見るべきであるとする「花道」説が、大半を占める。秋保書記官などは、この説の急先鋒である。

これに対し高山参事官と山崎書記官が、中ソ関係の悪化、農業政策の失敗の責任をとつたような形で、自ら隠退を声明するのやむなきに至つたという擬似「詰腹」説となえる。この間にも、ワシントン大使館からは米国の反響が公電で入り、中共、日共、ニュージールランド共産党の反響は外電で入り、アジュベイ辞任も某筋から刻々伝えられてくる。会議は、延々二時間以上になる。最後にぼくの見解を求められた。ぼくは次のように述べた。(註。ぼくがこの意見を述べたのは、モスコウ時間で十六日の午前十二時過ぎであった。手紙を書いている今が、午後十一時頃。瑛子がこの手紙をうけとるころは、既に世界中には、かなりの事実が周知となつていようが、それと較べて、このぼくの見解がどの位的を射ていたか、見てくれ。)

ぼくは、まず英米武官睡眠薬事件、独大使館員暗殺未遂事件、ゾルゲ再評価事件、

英米武官搜索事件等の一連の政治警察の動きをあげ、これらは、今回の事件の前兆であったと述べた。即ち、政治警察は、フルシチョフの方針を無視して、これらの動きに出ていた所、それは、これらの動きをかばう勢力が党上層部にあったため、その勢力は、フルシチョフの側近政治に不満を抱く旧スターリニスト（彼らは、必ずしもスターリンと同様の考え方をもっていない、もっと合理的であるが、ただスターリンの下で養成された最優秀の官僚連、むしろ正統派官僚である）を中心とする勢力で、党中央委総会では、既にその過半数に迫る勢力となり、フルシチョフ派との力のバランスは極めて微妙なものとなっていた。このまま、十二月十五日の国際共産党大会準備会議を迎えて、フルシチョフが失敗すると、フルシチョフ派は、派として根底からくつがえされる。このためスースロフなどスターリニスト派と妥協の道にでたフルシチョフ側近は、とにかく御大フルシチョフの退陣を無理やり押しつけ、ブレジネフ、コスイギンの布陣で、一応御大には退陣させつつも、派としてのフルシチョフ派の命脈は保った。従って、これはいわば予震（ママ）であって、もう一ゆれはさげられない。当分は、極端なフルシチョフ側近人事（例えばアジュベイ）の退陣が続こう。ぼくは、シェレーピン国家保安委議長の首は危いと思っている。軍部は、かねて平和共存政策に不満を感じている所、今般の消費財生産優先で遂に反フルシチョフに踏み切った。今回の決定は、フルシチョフ自身にとっても寝首に水（ママ）であって、秘密裏に全てはアレンジされた。

ぼくが、以上のように述べた所、下田大使は、この見解を非常に高く評価してくれ、結局この見解を骨組とする「詰腹」説に、大使館の見解はまとめられることになった。夜、七時、ホテルの自室に当地駐在の時事の記者清宮さんの来訪を受けた。大使館の緊急幹部会の概略を承知しているもようで、ぼくは、インタビューを受け、自説を述べた。当地外交筋の一情報として流すつもりのものであった。

モスコーの市民は、「さわらぬ神にたたりなし」というのか、皆黙りこくっている。街は不気味な静けさだ。明日から、新聞にもラジオにも、フルシチョフの「フ」の字も現れなくなることだろう。

この手紙の冒頭に「日記代りにこの手紙を書くことにしたので、読後、どこかに保管しておいてもらいたい」と書いたが、この手紙は、やはり第三者の手にわたると不味いことになる可能性がなきにしもあらずなので、折角書いたから投函はするが、読後焼却処分とせられたく、お願いします。この点、必ず守ってください。

モスコーにて

「雑誌『霞関会会報』平成二十一年五月号より転載」  
〈注〉「霞関会」は、外務省OBを中心とする親睦団体